

前 言

一、趣旨説明

本シンポジウムは本学会が企画するプログラムであり、本学会会則第3条（事業）第4項に載る「会員の研究に対する援助」をその目的とするものです。主たる「援助」の対象は、本会のいわゆる若手会員でして、二〇二二年秋開催の第七十四回大会において始めて実施され、つづく第七十五回大会でも行われました。

すでに本会は、若手学会員の研究支援を目的として、二〇一一年三月に「第一回若手シンポジウム」を開催し、それを発展的に引き継ぐかたちで、毎年の大会において「次世代シンポジウム」を実施しています。本企画もまた、若手支援に関する年来の精神を分け持つものですが、それとともに、書評活動の活性化という目的を掲げ、若手を含む会員相互の学術交流の場の創成を目指しました。本企画を、「次世代シンポジウム」と別立てで実施する理由はこの点に存するのですが、そのより良い形態に関しては、引き続き、会員各位のご意見をうかがいながら模索してゆきたいと思っています。

本シンポジウムはパネルディスカッションの形式で行います。パネルは、複数の評者のほか書評の対象とする学術書の著者および司会者の各位によって構成されます。第七十六回大会では二組のパネ

ルによる書評会を開催しました。次頁以降に、『大会要項』所掲の「要旨」を掲載します。

パネルの条件に関しては、学会主催の活動として企画の公平性をいかに確保するか、そもそも書評シンポジウムをどのようにして若手支援に繋げるか、といった点を考慮して定めています。左記のものは、二〇二四年度のパネルに適用された条件です。

一、パネリストのうち、著者と司会者、および評者二名は本学会の会員資格を有していること。

二、書評の対象とする著作は、著者にとってデビュー作に相当する学術書で、二〇二〇年～二〇二二年に刊行されたもの。

評者の年齢は、原則として、当該学術書の著者と同年齢もしくはそれ以下。

三、専門領域・所属機関・性別などについて、多様性が考慮されたパネルを歓迎する。

なお、評者各位に対しては、あらかじめ、学会ホームページの『研究集録』に、大会報告にもとづく書評を掲載することを伝え、寄稿をお願いしています。その文章に関しては、原稿用紙二十枚程度を上限として、それより短くとも可、といった文字数の制限を設けました。

二、パネルの概要（附目次）

パネルⅠ・松野敏之『朱熹』『小学』研究』（汲古書院、二〇二二年九月刊行、本文三二五頁）

『小学』は、近世東アジア地域で広く読まれた書であったが、近代以降の研究ではあまり注目されない。その原因は主に二つ。朱熹が編纂者ではないという見解が一般化したことと、内容が経書等からの引用に過ぎないとみられたことである。本書では次のような検討を行った。

〔第一章〕朱熹と劉清之の書簡を再検討し、現行本『小学』は朱熹の編纂書であると結論付けた。その過程で、朱熹と劉清之には編纂の傾向に違いがあることを確認。原典そのままに引用する劉清之に対し、朱熹は経書であっても修訂を加えていた。

〔第二章〕朱熹の編纂傾向をふまえ、『小学』の文章と原典をすべて調査すると、多くの文章に修訂の跡が確認できた。時代に合わなくなった古札や小学として学ぶには不適切な話などが刪去されていた。

〔第三章〕『小学』には朱熹の思想が反映され、日常的な孝の話が多い。中には従来の小学教育の書では採りあげられなかった「父母への諫め」という話題もある。ここでは言葉遣いや表情・態度に気を遣うことが示されていた。

〔第四章〕朝廷が旌表する孝と『小学』の孝の違いについて検討。割股のような極端な孝行為や漢唐で語られた孝感譚などを朱熹は教えとするつもりはなく、『小学』にも収めていない。『小学』では

「孝」が日常道徳として位置づけられている。

〔第五章〕「敬」は朱熹が提唱した重要な学問論である。『小学』は「敬」の具体的な方法を示すと共に、経書に見える聖賢の教えと「敬」を結びつけるという重要な役割を担っている。

〔第六章〕朱熹没後、南宋から清末に至るまでの『小学』の受容を概観。特に明中後期から清初にかけて、『小学』は科挙との関連から廃れていた。

〔終章〕朱熹が生涯にわたり様々な小学教育を模索していたことを整理。『小学』は朱熹の小学教育における集大成となる。以上の通り、『小学』は朱熹の意図に基づき、入念な配慮のもとに編纂された書であることを論じた。

パネリスト

評者…梅村尚樹（北海道大学。科挙・学校からみる宋代士大夫社会と思想）

佐野大介（名古屋大学。日中における孝思想及び孝子顕彰）
新田元規（徳島大学。中国明清代の経学史。明清交替期の礼学を中心とする）

著者…松野敏之（国士舘大学）
司会…三浦秀一

【目次】

序章

第一章 朱熹小学書と劉清之小学書

第二章 『小学』編纂

- 第一節 『小学』内篇——原典からの修訂
- 第二節 宋代訓蒙書と『小学』の構成
- 第三章 『小学』における孝
 - 第一節 明倫篇「父子之親」
 - 第二節 孝と諫め
 - 第三節 朱寿昌譚
- 第四章 孝行譚の選択
 - 第一節 累世同居・廬墓・孝感
 - 第二節 割股
- 第五章 敬身篇の編纂
- 第六章 元明清時代の『小学』
- 終 章 朱熹と小学教育

パネルⅡ・加納留美子『蘇軾詩論——反復される経験と詩語』(研
文出版、二〇二二年一〇月刊行、本文二九五頁)

本書は、北宋の蘇軾(一〇三七—一一〇一)の詩文にみられる
独自の反復性に着目し、その創作意図を論究したものである。

蘇軾は官途にあつて、(一)政治的対立に直面し、(二)政争を
避けて地方官を歴任し、(三)罪臣として左遷され、(四)名譽回
復を果たすという展開を二度経験した。興味深いことに、その経歴
と呼応するように、蘇軾の詩文には過去に詠んだ自作の表現や着想、
構成を踏襲して新たに作成するという手法が度々確認される。本書
ではこの手法を蘇軾の「自作参照」と称し、後半生の詩を中心に、
第六章に亘つて論じた。

序章にて蘇軾作品の「自作参照」の概要と分類を行い、第一章で
「自作参照」の起点となつた徐州知事時代に着目し、「吾生如寄耳」
等を例に、現地での経験が後半生の創作に与えた影響を考察した。
第二章から第五章では、個別に主題を設定し、「自作参照」によつ
て形成された作品群を検討した。そこには、弟蘇轍と唱和した「夜
雨対牀」詩や左遷先の梅花に寄せた詠梅詩、嶺南の山を称揚した羅
浮山詩が含まれる。そして第6章では、「自作参照」が殆ど用いら
れなかった海南時代の作品に注目し、「欠月」という詩語に象徴さ
れる詩人としての新たな境地を指摘した。

蘇軾にとつて「自作参照」とは、博覧強記を誇る手段ではなく、
浮沈激しい官僚人生の中で編み出された一種の戦略であつた。すな
わち、過去の似た状況下で作られた自作を引用しつつ、現在の困
難な状況を肯定的に描き、もつて今後の好転を期待するという言祝

ぎの役割が期されたのである。

パネリスト

評者…小笠原淳(熊本学園大学。近現代詩)

陳 佑真(都留文科大學。宋代思想)

原田 愛(金沢大学。蘇軾を中心とした宋代文学)

著者…加納留美子(相模女子大学)

司会…佐野誠子(名古屋大学)

【目次】

序章 蘇軾詩における反復性とその検討

第1章 徐州時代の蘇軾——「自作参照」の視角から

第2章 「人衆者勝天、天定亦勝人」——詩人が託し、詠った「天

報論」

第3章 「夜雨対牀」——蘇軾兄弟を繋いだもの

第4章 梅花の「魂」——詠梅詩における「自作参照」

第5章 蘇軾羅浮山詩考——繰り返された「作法」

第6章 海南時代の詩における風景描写——詩人としての挑戦

終章 ——「自作参照」が齎したもの